

旭川市民劇場 例会評価

2025 劇評

合併号



私の劇評 私の市民劇場賞 五十字劇評NO.74

「オペラと舞踊になった『遠野物語』」

劇団文化座
母

座・高円寺
「ジョルジュ」



五十字劇評NO.74

言わせて!

今日の芝居

ジヨルジュ

〔50代〕

▼ピアノと物語という内容でどのようなものかと楽しみにしていました。舞台?ピアノの演奏会+芝居で音楽がメインに感じられた。(女性)

▼シヨパンの曲が好きなので、素敵にピアノの演奏を堪能出来て嬉しかったです。竹下さんのジヨルジュもとても良かったです。(女性)

〔60代〕

▼竹下景子さんは「北の国から」の雪子おばさんのままだった。象徴的に出てくる「1848年」はフランス革命の年だ。「ヘルブラ」の50年後、ブルジョアvs労働者階級の闘い。平尾有衣さんのピアノが素晴らしかった。後半は彼女の演奏に聞き入った。(男性)

▼今日はすばらしいピアノとの物語を聞かせていただき感激しました。近くでシヨパンの世界を感じられてしあわせです。(女性)

▼恋に落ちるとタイヘン。殊にジヨルジュという有名作家は。愛と革命。女性の地位。苦悩も音楽と共に思い出し。(女性)

▼ピアノ演奏がメインの舞台。語りはむしろ幕間の印象。シヨパンが当時のパリのサロンで脚光を浴びる情景が浮かぶ。でも何かが足りない気がした。(男性)

〔70代〕

▼ジヨルジュ・サントのイメージとかなり違う竹下景子さんの解説で、若い平尾有衣さんの演奏。シヨパンはピアノの中で生き続ける。(女性)

▼作家ジヨルジュと弁護士ミッシェルの手紙のやり取りとピアノの演奏と聞いていましたが、舞台を観て誰が主役?ピアノの演奏のたびに拍手はいるのと疑問ばかりでした。ピアノをバックに竹下景子さんが手紙を読んだシーンは素敵でしたが、シライケイタさんは少し早口のようで私には聞きづらいところがありました。シヨパンの恋人と聞いたことがあり

ましたか?この舞台に出会って、ジヨルジュ・サントは2人の子供を持つ母親で、女流作家でもあり71歳の生涯の没後に出た全集で105巻を数える著書があると聞いて驚きました。(女性)

▼ピアノ演奏会へ行くという気分でした。「英雄」では思わずプラボーと叫んでいました。ジヨルジュの書簡の中で、2月革命が話され、その後のフランス国内のことがよくわかりました。でもやっぱり芝居ではないよな。(性別不明)

▼竹下景子さんの朗読とピアノの音色が未だ耳に残っている師走です。シヨパンの生涯がこのような形で表現されるとは!!(性別不明)

▼演奏ごとの拍手のせいか芝居への没入感が薄かったが、手紙の朗読からピアノ演奏という流れが、当時のシヨパンの心情をより身近に感じられたようで良かった。

▼とても親しみ易く、心に響く「音楽会」でした。感動は表現のスタイル、ジャンルにかかわらず、良いものは良いと思いました。

編集スタッフから

手紙を読み合う掛け合いと、じっくり聴かせるピアノの生演奏。私たちは『ジヨルジュ』で、また新しい形態の舞台に出逢うことになりました。自分の常識の殻を破ってくれる作品との出逢いは、個人的には大歓迎。ジャンルを問わず観続ける市民劇場ならではの良さだと思っています。演劇という芸術の懐の深さに、またしても脱帽です。



2025私の市民劇場賞

第38回旭川市民劇場賞は、劇団文化座『母』に決定、総会で発表されました。

会員証の投票用紙でお寄せいただいた、旭川市民劇場賞推薦作品の感想や一年間の例会の感想をご紹介します。

2月例会(57票)

劇団NLT

『O.G.Ⅱ』

- アチワさんがとてもステキでした。
- 2人の女性がたくさんの苦労や悲しみをのりこえ、歌って踊る姿に元気をもらいました。
- 旺さんの脚がきれい！ 兔に角笑って、ホロリとして「シワ〜」「シミ〜」が頭にこびりついている。楽しくて、ストレス解消した。
- 数回しか見られませんが、とても貴重な体験の連続でした。忙しい生活の中で、自分の一部となっ

ていくつもりです。
●女優さんの歌や踊り、そして年月が積み上げる魅力、重み、笑い、全て輝いていました。「今、現代」を大にしている所も良い。最低は10月例会。ストーリー、女優、テーマ、全てがうすっぺらで馬鹿馬鹿しい、不快だった。

4月例会(36票)

オヘアシアターこんにやく座

『オペラ遠野物語』

- 「今昔」のものがたりを現代のテンポで扱っている所が良かった。
- 遠野物語に生きる力をもらいました。生って良いなあ。
- 明るい先品、喜劇などが多いとよい。
- 今年もバラエティに富んだラインナップで一年間楽しむことができました。いい例会校正を来年も期待します。

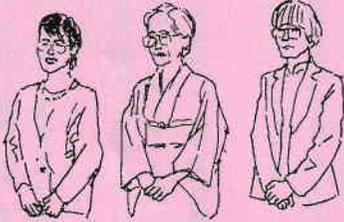


6月例会(50票)

プレオム劇

『ハリカンとダイヤ』

- 楽しかったです。これからも楽しい内容の劇の方がうれしいです。よろしくね。
- 明るく楽しめる物も嬉しいです。



8月例会(149票)

劇団文化座

『母』

- 愛さん、代表は退いてもまだまだ舞台での活躍を期待しています。
- 今の社会を考えるきっかけになるお芝居。
- 知らなかった多喜二に出会えたのは一生の宝。宗教的な部分はひっかかったけれど、佐々木愛さんの「母」はもしかしら他の役者さんでは無理かも。賞を決めるのに迷うくらい作品を企画してください。
- 佐々木愛さんの静かでやさしく、愛あふれる語り口がとても感動的でした。多喜二役の藤原章寛さんも良かったです。これからも期待している役者さんです。
- 愛さんのお母さんはしみる。
- どの作品もそれぞれ良い処があったのですが、三浦綾子の『母』の小説を読んでいたのでとても興味深く、佐々木愛の演技も素晴らしいかったです。
- 良かった。とにかく心に残る作品でした。包み込む様な優しさ、温かさ、佐々木愛さんの演技力。全てがとても素晴らしいかったです。
- 母の愛に感動。佐々木愛さんすば

らしい。力強い。

●ミュージカル、オペラ、一人芝居と色々でしたが、8月『母』、10月『其の女』が良かったと思います。が、

全体的には8月が良かったと思つた。

●その人がそこに居る。演じているのではなく、その人がそこに居る。

●演劇鑑賞会で観る演劇なのと疑いたくなる例会が目立つ!!もっと、心をゆさぶるような演劇を観たい。ただ楽しければいいわけではない!!

●市民劇場楽しみにしています。ずっと続けられますように!!



10月例会(41票)

Nana produce

『其の女』

●最後の科白が心に残っています。戦後八〇年経った今、戦後生まれの者として、戦争の悲惨を深く感じられる作品でした。

●一人芝居とても素敵でした。

●バラエティある例会であつたでしょう。『賞』は8月『母』と10月『其の女』で考え、共に2時間弱の完成度に拍手。

●戦争は戦わない人が始め、戦わないう者だけがギセイになる。いつの世も悲しみが残さない。O.G. IIも楽しかった。

●一人だけどほかの人もきちんと観えました。



12月例会(84票)

座・高田寺

『ピアノと物語 ショルジュ』

●物語りとピアノの調和が新鮮に感じられて、とても良かったです。『遠野物語』と迷いました。

●今年の6例会どれも楽しく、至福の時を過ごすことが出来ました。来年も期待しています。今日のショパンに感動しました。

●フランス革命の時代に生き、パリコミュンも知り、カール・マルクスも同じ時代を生きていたことに感動です。

●生演奏が素晴らしかったです。

●今年はこの例会もすばらしくとても迷ってしまった!『母』もよかったが、このショパンの生のピアノの音色は心地よく、朗読をひきたてとてもよかった。

●全部良かった!一年間楽しませてもらいました。1番を決めるのがつらいですが、先月ショパンコンクールを徹夜で観賞したので、12月例会を1番にしました。

●足が悪くなり、やっと観劇しました。ピアノと朗読素敵を試みでした。

●2月の『O.G. II』も良かったです。ショルジュは素敵でした。

●以前の例会は忘れてきました。本日はショパンの曲たっぷりききました!聴力の衰えてきた自分には、最高のひとときでした!

●竹下さんの声もよかったです。ピアノ

もよかったです。

●8月と12月で迷いました。唯、久しぶりのショパンのピアノ曲がとても嬉しかったです。



2025

私の劇評

オペラと舞踊になった『遠野物語』
オペラシアターこんにゃく座を観て
そしてそれから...

A01 魔術師 大原慎子

文学を志す遠野の青年佐々木鏡石(喜重)を北野雄一郎が爽やかに演じた。鏡石からの聞き取りを柳田園男

が明治43年(1910年)に『遠野物語』として自費出版した時、献呈された鏡石が自らの書きためた原稿を天井めがけて放り投げる場面は強烈だった。民俗学は伊能嘉矩が柳田よりも先に研究者として居たが、『遠野物語』出版を機に確立されたという。

佐々木鏡石、柳田泉男、水野菜舟の三人の関係も、この演劇を観て初めて知った。やがて鏡石は郷土の伝承発掘と記録を続けることを生涯の仕事とし、45才で早逝する途に『聴耳草紙』『遠野のサシキワラシ』とオシラサマ『遠野奇談』などを著した。

1928年には花巻に宮澤賢治を訪ね、以来、1933年に二人が相次いで亡くなる迄、交流があったという。

演劇を観て、柳田泉男全集の第二巻『遠野物語』を読もうと決心した。本編199話に加え、『遠野物語拾遺』299話も読んだ。私の日常生活で、今迄見たことがなかった漢字が次々に出てきて読了まで辞書を離せなかった。読んでから地図帳で位置を確かめた。

山や森、沼や池、そして東方には海峡がある岩手県。そのような土地に生きる人間と共生する生き物たち

飯銅(クダギツメ)、御犬(オオカミ)、熊に狸に狐に蛇。そして河童、懸巢、閑古鳥、梟など鳥獣たちや人間と同じ屋根の下に同居する馬。

病弱だった鏡石に祖母が語り聞かせた数々の不思議な話。「山口の大同の当主名が大洞万之丞、此人の養母名はおひで、佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じ、まじないにて蛇を殺し今も達者なり」と始まるのが第69話。オシラサマやオクナイサマについての話が中に書いてある。読みながらこれは法螺話かと思う程。

他にも例えば拾遺の中に、愉快な話が記されている。「兄弟が山皇で大熊を発見、木にできた大穴の中に入るのを目撃し、捕獲して金儲けしようと思いつつ……ところがその時に大地震、揺れが止み待ち構えても熊が穴から出て来ない……見れば向こうの山の岩上に長くなっていた……」地震で吹っ飛んだのは人間ではなく大熊の方だった。読みながら一人で笑ってしまった。

そして昨年はもう一つ、柳田國男生誕150年と戦後80年を記念して、Kバレエオプトが企画した『踊る。遠野物語』が上演された。その札

幌公演が今年2026年が明けた一月二十日(火)にあった。万難を排して観に行った。

熊川哲也総監督のもと、企画は高野黍樹。演出、振付、出演に森山開次。Kバレエのダンサー、舞踏の磨赤兒と大駱駝艦、歌舞伎の尾上真秀少年らが出演。その舞台は舞踏の要素が勝っていた。こんにやく座のオベラで闊と表現されていたもの。それを恐れ多いもの得体の知れないもの、あるいは『死』とすると、Kバレエオプトの方では逆に白で表現されていたと(私は)解釈する。顔や上体の素肌に白塗りの舞踏の踊り手や真白い衣を纏った少年。昔、モーリス・ベジャール振付の、男性舞踏手の群舞『ルーミー』を観た時と同様の感動があった。『踊りが持つ祭祀的要素について』昔、夫が教えてくれたものだった。「人々が生を確認し共鳴し合う祭儀の場」。『踊る。遠野物語』にはそれが強調され神々しかった。二作は両方とも鹿踊りで締め括られた。遠野発日本のオベラは、ピアノ、チェロ、打楽器の生演奏で、一方、踊る…方は、琴、尺八、和太鼓の生演奏とシンセサイザーで逸話と逸話が

紡がれた。

演劇オベラの脚本は長田郁恵。旭川市民劇場の公演で何度も名作が上演されてきた井上ひさしに師事した人とパンフに紹介されている。その人が「光と闇、生と死、神と人、山人と平地人、善と悪、その混沌を全部飲み込んで遠野の暮らしがありました。」と記している。演出の真鍋卓嗣は「見たくないものを隠すことができず、逆にそのよつなものを『ある』ものとして共生する人間の智慧を感じることが出来る」と記している。

今、書物の役割と演劇や舞踏、バレエなど舞台上で演じられた芸術の役割について考えている。

全て生活を豊かに保つための心の拠り所、また明日もしっかり生きて行くための。

観劇して感動し、学習する意欲が湧き、何年も読まずに過ぎてきた書物を読み、この数カ月は、またも退屈とは無縁の日々だった。



